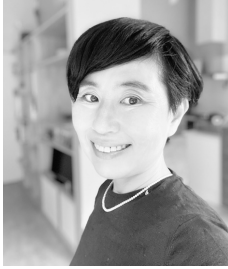


# 第六十九回〇先生賞

蚱 蟬

右の通り贈ることを決定した。

令和五年一月



## 作者略歴

一九七六年 広島市生まれ  
二〇〇六年 コスモス短歌会入会  
住所 神奈川県逗子市

神奈川 齋藤美衣

コスモス短歌会

## 作者感想

初めて歌集を読み、自分の歌を作ったのは、中学生の時、入院中のベッドの上でした。三十代の始めに再び入院をし、病院のベッドの上で初めて〇先生賞に応募する作品を作りました。その時、「この賞を取るまでなんとか生きよう」と密かに誓いました。それから十年以上が過ぎました。夏が来るたびにその時々自分の自分と向き合い、歌を作ることはわたしにとって大切な時間だったと感じています。

歌を読むこと、詠むことを支えてくれた短歌を通じて出会った方、そしてわたしの人生に触れてくれたすべての方に深く感謝します。

# 蚱 蟬

第六十九回O先生賞受賞作品 神奈川 斎藤美衣

青天は万緑のやま踏み越えてしづかな窓のいちまいへ来る

戦後史のおほき足うら駄までの五分を急ぐわれを圧したり

ひろしまの蟬の鳴き声イヤフォンの奥より迫るおほ波のごと

八月六日

友の乗る路面電車はゆるやかに相生橋に差し掛かるころ

朝の息ひしめく車両運ばれて連結をする八時十五分

二番線ホームの隅に活けられし菊はきのふのすずしさ保つ

よろこびと孤独と疲れを記憶して少女のシャツは車輻に眠る

この夏を生きてあること確かめよ あかるい店にサンダルを買ふ

ほろほろと崩れるほどに塊の肉を煮込みてころほぐれる

掌のおほき<sup>てのひら</sup>に掬ひとられたるかたちに温し庭の溜まりみづ

肉体をすつかり脱ぎし爪切りの銀の骨格手のなかにあり

平熱のデラウエアの一粒を出かける足が潰してしまふ

長崎、山王神社

眠る刻ただふたりだけ眠らずに 地に手を伸ばすクスノキ、くすのき

長崎大学 医学部

靴には抗癌剤と受験票 かまぼこ坂をわれは上りき

被曝二世だから病を得たのかとかつて二人に問はれし夏よ

産めないと医師告ぐる声とどまれり三人を産みて三人亡くせり

まはだかのからだ隈なし夏まひる軌跡たしかに子はみづに入る

被曝樟みづに降下すこゑ持たぬ蚱蟬なはせみひとつ止まらせたまま

顔見えず麻の日傘は防砂林抜けてこの世の街へ紛れぬ

喪服着る生者のからだ喪服着ぬ死者のたましひ はちぐわつさみし

たよりなきいんげんのすぢ取つてをり巨き夕日に覗かれながら

エプロンの結び目を解くぬれた手はわれの手でなく、樟の手ならん

月のものほそほそと来てこのからだもう何者も産まぬあかるさ

雪虫が飛ぶ晩だつた墓碑銘の溝の浅きにゆびを差し込む

右足の中指の先に触れながら小石は夜の改札を過ぐ

うつすらと汗を帯びたりゆるき坂上る背中を夜気の手が圧す

われがまだ産むなら楽器、明け方の空の遠をちまでカノンひびかせ

真夜の湯にゆるぶ体のたよりなさあるべき器官うしなひしごと

山頂にかかりて重しあぶらづき地のたましひを一身に受け

にんげんはほんたうはよいものでせう塩壺にまた塩を足したり